

インドの思い出 (その二)

大森 海太

インドではアラビア海に面したムンバイ(旧ボンベイ)が首都デリーに次ぐ第二の都市で人口二千万人超、ベンガル湾に面したコルカタは第三位で人口千五百万人、いづれも旧英国統治時代の栄光の面影を残している。

ムンバイの中心街は十九世紀西欧風の立派な街並みが連なっていて、重厚な建造物があたりを睥睨している。ところが空港のほうに向かうと一転して道の左右は文字通りのスラム街となり、とても足を踏み入れられるような場所ではない。

そのあたりから見渡すと、はるか彼方に小高い丘が霞んで見える。そのてっぺんは「鳥葬」が行われるところで、神聖な地域で一般の人は立ち入れないとのこと、そんな箇所を遠くからとはいえ直接目にして、ちよつと動揺した。食物連鎖の頂点にいないはずの人間が鳥に喰われて連鎖の輪に還る、鳥葬とは火葬や土葬とは違う究極の自然のリサイクルかもしれない。

それにつけて思い出すのが、コルカタからハルディアに向かう道すがらである。ときどき何十頭もの牛の群れが道路いっぱいにのろのろ引かれていくのだが、牛を大切にしておく国柄、車の警笛を鳴らすこともなく、じつと通り過ぎるのを待つ。

道の両側は一面に畑とも水田ともつかぬ緑がどこまでも拡がっており、所々の木立の中に民家が見え隠れする。一部に水たまりが見える湿地のようなところで、炊事、洗濯、上下水等々、日々の生活のすべてがまかなわれているらしい。これまた我々とは違う自然のリサイクルの世界のように見受けられた。

当時物流子会社の役員だった私は、あるときそのあたりを通りかかり、車を停めて道端の土手際で小用を足した。ところが気がつくと不覚にも誰かさんの朝の遺物を踏んずけているではないか。げげーっ！ 大慌てで車のトランクからペットボトルの水を出して洗い流した。

翌年、私は図らずもその会社の社長に就任することになった。インドで一緒だった人から「大森さんはあそこで運がついた」との祝辞をいただいた。